



飛躍する中小都市「岡谷モデル」の模索 日本版スローシティ 幻の宰相 小松帯刀伝

小林 隆一*

はじめに

今回の書評では、『飛躍する中小企業都市「岡谷モデル」の模索』、『日本版スローシティ』、そして復刻「幻の宰相 小松帯刀伝」の3冊を取り上げます。あえて、この3冊を取り上げる理由は、次の点にあります。『飛躍する中小企業都市「岡谷モデル」の模索』は、地域総合研究所の研究テーマの一つである“諏訪・岡谷地域の継続的研究活動”に対応するものです。

『日本版スローシティ』は、“地域固有文化・風土を活かすまちづくり”を提言する書です。この書では、スローフードを起源にイタリアで生まれた「スローシティ」の発想を参考に、日本文化、そして地域固有の文化・風土とそこに住む人のライフスタイルを尊重しての街づくりとそれに対応しての商業のあり方を説いています。これは、上述の諏訪・岡谷地域の研究にも関連するものです。

3冊目の『幻の宰相 小松帯刀伝』は、NHK大河ドラマ「篤姫」によって生まれた全国的な鹿児島への関心が、一過性のフィーバーに陥らないために、より質の高い篤姫研究、さらには鹿児島学への探求を念じて、その切り口の一つとなればとの思いからの書評紹介です。

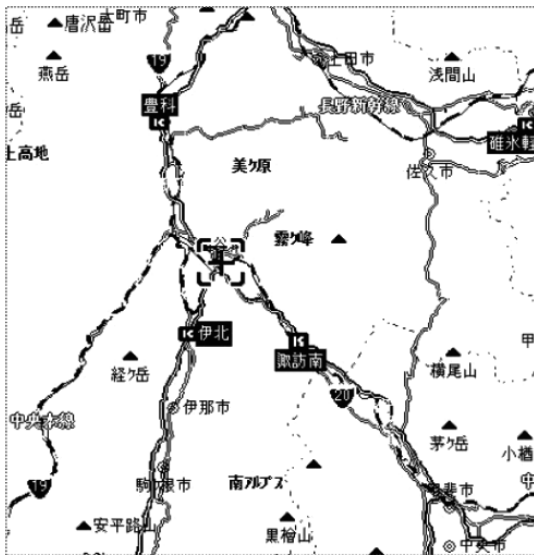
書名	著者	出版社	発刊年
飛躍する中小都市「岡谷モデル」の模索	関満博 辻田素子	新評論刊	2001年
日本版スローシティ	久繁 之介	学陽書房	2008年
幻の宰相 小松帯刀伝	瀬野富吉	宮帯出版社	1986年初版 2008年復刻版

1. 『飛躍する中小都市「岡谷モデル」の模索』

バブル経済の崩壊以後、十年を経過し、21世紀に踏み込んだものの、日本経済は依然として次のステージを見出し得ていない。経済の潤滑油であるはずの金融は混迷の中から脱出できず、また、失業率は毎月の発表のたびに高まり、大学新卒の就職難は「超氷河期」の状態を続けている。1980年代中頃までは、こうした事態が生じるなど全く予想もされていなかった。日本経済は、日本産業にとって思いもよらない事態が続いているということであろう。

このようなマクロの困難の中で、地方経済はさらに厳難しい状況に陥っている。事実、地方小都市の多くは、この20～30年の必死の努力によって大都市圏からの有力企業の工場誘致に成功し、経済基盤をかつ

* 本学経済学部地域創生学科教授



での農業から工業に切り換えたと思っていた矢先に、誘致工場のアジア移管、事業縮小に直面している。そして、新たな経済基盤を獲得しようにも、全く次の道筋を見出すことができない。久しぶりに訪れた地方小都市のなじみの店を探しても、空店舗となり、かなり長期にわたって閉じられたシャッターの錆びついている姿に意外な思いを深めるであろう。全国に限りなく多い人口3万～6万人程度の地方小都市は、今存亡の時を迎えているといっている。

振り返るまでもなく、全国各地の人口3万～6万人程度の小都市は、豊かな歴史、文化をはぐくんできており、実に魅力的な地域である場合が少なくない。地元の材料による工夫を重ねた食品、土地の良さに生まれた地酒、そして、風景に溶け込んだ地元を愛している魅力的な人々。これらはまさに日本の良さを醸し出していると言ってよい。こうした魅力的な地方小都市が経済基盤を脆弱化させ、疲弊していくことは、日本の将来にとって重大な問題であるように思えてならない。歴史的、文化的にまとまりのある、身の丈サイズの地方小都市こそ、そこに住まい、働く人々の愛情が注がれる「大切な土地」なのである。

そうした「地域」に私たちは改めて大きな価値を見出して行くべきだと思う。豊かな地方小都市こそ、私達の大事にしていかなくてはならない「こころの拠り所」なのである。

そして、このような全国の地方小都市の中でも、危機感をバネに新たな方向に向かおうとしている「地域」が目につくようになってきた。もちろん、各地方小都市の置かれている状況は様々である。それぞれの地方小都市が、その置かれた状況を的確に受け止め、さらに地域の経営資源を見直し、人々のエネルギーを結集し、独自の方向を見出していけば、日本の地方県にも新たな時代が訪れるであろう。是非、それぞれの地方小都市が可能性を信じて一歩を踏み出し、新たな局面を切り開いていって欲しい。一つの成功が周囲に刺激を与え、そして、新たな希望をもたらすことは言うまでもない。

上述は、本書の「はじめに」の部分1～2ページの全面転載である。本書が刊行されてから、8年を経過した今も、ここに書かれた危機的状況は好転の兆しは見られない。それどころか、ますます混迷の度合いを深めている。米国発の金融危機の影響もあって、地方経済は疲弊と混迷の度合いを深めている。あえて、長文に及ぶ原文を転載した理由はこの点にある。こうした状況を打破し、これからなにをすべきなのか。本書はこれに関して示唆に富む提言、指摘がなされている。

序章 地方都市の現在

この章では、日本の地方都市は歴史・文化にはぐくまれた非常に個性豊かな、一つのまとまりある「地域」としてとらえられている。そしてこの書が上梓された2000年当時、活発に推進されている市町村合併に関して、“地域的個性を十分に尊重しながら進めて欲しい”と訴えている。

一言書き添えると、“地域的個性”の具体例として方言があげられる。一般に隣接する地域ではそこに住む人々の交流が盛んで、双方の言葉もよく似ている。ところが、険しい山や急流の川など人の往来を阻む障害物があると、言葉の断層が生じる。また県境、町境といった人為的な境界が言葉の違いを生み出す要因ともなる。

さらに、律令制に遡る奈良時代に設定された地理的区分、そして江戸時代の藩領制度が、言葉遣いに影

響を与えている例は各地に見られる。たとえば青森県の津軽弁（弘前、青森など）と南部弁（八戸など）の違いが有名である。岩手県でも伊達藩領だった県南部の方言は盛岡など県中北部と異なる。

こうした点から、本書が訴えているように、地方都市の存続、発展に向けての施策づくりに当たっては、規模の利益や経済効率といった量の向上に偏ることなく、歴史、文化といった地域特性への対応を怠ってはならない。平成の大合併では、この点への配慮を欠いたミスマッチが幾つか発生したのは残念である。



出典：『エリアマーケティング基本』小林隆一著 評言社刊

第一章 工業集積の特質

岡谷に焦点を当て、この地の地域特性と岡谷工業の構造的な特質を分析している。ここで、岡谷は諏訪と共に「日本の精密機械工業の中心地」「東洋のスイス」と美辞麗句を並べたててはいるが、内実は「小物、細密、消費財の量産」が生産構造の基本であり、加工機能、技術部門を欠くと、この地の問題点をズバリ指摘している。

第二章 岡谷工業の地理的展開

諏訪湖を囲む諏訪盆地一帯に発展した精密機械工業の地域的分布の特徴に着目し、その発生、発展のプロセスを詳細に分析している。そして、山あいの盆地に位置することからその空間的制約の中で、新たな工場用地をどう生み出していこうとしているのか、また、どうすべきかを論じている。その結果としては、岡谷の今後の発展のためには、市街地の再開発、工場の再配置をどのように考えていくかが問われると論じている。

第三章 岡谷の位置的ポテンシャル

日本列島の中心部の内陸に位置し、高速交通体系上はやや不利な位置にある。とはいえ、JR中央線の高速化が進み、東京圏のみならず中京圏とも時間的距離は縮むと予測している。

併せて通信・物流革新の進展が岡谷の位置的ポテンシャルが問われるところだとの指摘は、的を射ている。

第四章 就業構造と人的資本の特質

教育県長野県の一都市である岡谷は、①県風土と同様に教育都市としての土壌を持つ ②自立心旺盛 ③個性豊かな人材を輩出している、といった人的面での地域特性に着目し、これが今日の独特の産業集積、技術集積の形成に貢献したと分析している。

第五章 新たな方向に向かう中小企業

ポスト精密機械工業の時代、岡谷はどう対応していくべきかを考察している。特に、地域全体が時計、カメラに傾注の経営スタイルから脱し、それぞれが自らの経営資源を見直し、それを高める方策を模索している点、そして多様なネットワークの中で自らの存在領域を確保しようとする地場の中小企業の動きを評価している。

第六章 アジア展開に踏み出す中小企業

“中小企業の海外展開”は、岡谷の特徴の一つとし、自前でアジア進出に取り組む事例を調査分析している。ヒト・モノ・カネに万全を欠くこうした企業の果敢な行動とその成否に関する分析事例は、多くの教訓と示唆に富む。

第七章 中小企業ネットワーク

岡谷市役所は地域振興の黒子に徹し、同業種集団のみならず異業種交流集団の結集を図り、実績を上げつつあると、行政の姿勢を解説している。

終章 地方工業都市の未来

岡谷での事例分析を通じて、地方小都市がその歴史的、地理的条件を意識しつつ、地域産業振興、地域の活性化へ、どう取り組んだらよいかを提言している。そして、「岡谷モデルの構築」と題して、「工業魂」と自立心を第一に挙げている点は、補助金だよりの経営からの脱却が叫ばれる時代の要請を先取りした、先見性に富むものである。

◆本書からの学び——産業振興と、歴史・文化の結びつき

生活の拠点である家そして住まいは、自然条件と結びついた生活文化や地域文化と密接に関連している。たとえば、福井県では根強い仏教文化の影響により、家々の多くは格式ある仏間とこれに続く座敷をもつ。そして、金沢の室内和室の壁は赤、濃紺、黄色など、実に鮮やかな色彩を施してあるが、これは長く厳しい冬の屋内生活に潤いを与えるという効果を持つ。これには、加賀百万石の歴史、格式尊重の影響が色濃く残る。

出雲地方では、古くから京間系様式を好み、今もその指向は強く、住宅供給する地元業者に堅持されている。このように住様式そのものが地域文化の一つとして構築される例は少なくない。

また、地域の主な農産物が何であるかによっても住宅の影響を受けている。農業か酪農か、あるいは養蚕も盛んなのか。地場産業があるなら、繊維業なのか窯業なのか、それを商う商業が盛んであるのか等が、住宅の外見や構造、広さなどに大きな影響をおよぼしている。

岡谷に話を戻す。第二次世界大戦にまで当地は、和田峠を隔てた丸子、そして群馬県の富岡とともに、日本の蚕糸業3大都市として、隆盛し世界に名を知られた。対して、隣接する諏訪は、戦後の成り上がりではないか、といった葛藤を岡谷に永く住む人々は持つ。諏訪と岡谷が合併に至らない根源はこの点にある。

グローバル化の進展で国と国の間の垣根が取り払われようとしている時代にあって、遠く律令の時代に遡り、まちの成り立ち、歴史・文化にこだわるのは、時代錯誤との意見もあろう。だが、私はグローバル化時代だからこそ、地域の歴史・文化にこだわり、その希少性を生かしての都市政策そして産業振興を図るべきと強く主張する。この点で、市町村合併は、“地域的個性を十分に尊重しながら進めて欲しい”とする、2001年刊行の本書を8年後に読み返して、その意をさらに強めた次第である。

「なぜ、そう言えるか」については、次号以降の本誌を通じて論じさせていただきたい。

2. 日本版スローシティ

本書では、都市研究センター研究員の久繁哲之助氏が商業振興の観点から、地方都市における町づくりの観点からの店づくり、さらに商業経営のあり方を論じている。まえがきで——「まちづくり」に関する

る本はたくさんある。そのような本に書いてあることを忠実に実践して、まち（特に地方都市）は活性化しているだろうか、”——と、いきなりインパクトある疑問を發している。

そして「ものごとが専門家が言ったようにならないことを發見して驚いたことが何回あったらだろうか。世間に広くいき渡っている専門知識と現実が相反していることを何度目にしたことだろう。結局のところ、都市問題で最大の疑問は『本当の専門家は誰のことだろうか』』とのロバータ・B・グラッツの言葉を借りて、問題提起している。

こうした指摘は、経営コンサルタントを業とし、いっばしの専門家を気取ってきた私にとっては心臓に突き刺さる言葉である。

さらに、既存の「まちづくり成功事例」や「成功（活性化）手法」を鵜呑みにしての模倣は、失敗を招くと警報を發している。その原因として目に見える部分と、論理で説明可能な部分だけを、てっとり早く「模倣」しているだけで、その本質を見逃していると、たたみ込んでいる。

そして、まちづくりの成功の根底には、地域に根づいた文化・風土とその地域に集まる市民のライフスタイルを尊重すること。言葉を換えると、「重要なのは目に見える器より、不可視な精神こそ、現代日本の街づくりに最も求められる」と、提言している。この考え方は前述の、『飛躍する中小都市「岡谷モデル」の模索』と奇しくも一致するものである。

なお本書の構成は、前半が「まちづくり理論書」、後半第四章以降が「まちづくり事例集」であり、その全てを「スローシティ」という視点から解説している。

本書では、「可視・論理・効率」から造られる均質化した都市を「ファストシティ（Fast City）」と定義している。ファストシティは、学者や行政が大資本と連携して考案、大資本が経済的利益を享受してきた。しかし、それは地域固有の風土・人間性を衰退・喪失させた。その弊害は小さな都市ほど大きいとも、分析している。

ファストシティに対しての「スローシティ」の概念は、地域固有の文化・風土と市民のライフスタイルを尊重する新しい街づくりにある、と定義している。そして日本の街づくり専門家は地域市民のライフスタイル・文化をどれだけ知っていて、知ろうと努めているだろうか、との苦言を呈している。日本の多くの地方都市が町中の賑わいを失いつつあると嘆息し、その脱皮法は、「可視・論理・効率」から造られる箱モノや制度の模倣だけではなく、スローフード運動を原点とする「スローシティ」精神にある、とも述べている。

また、2005年4月施行の「地域再生法」の精神は、著者の説くスローシティの精神と非常に似ているとし、その具体例として内閣府が作成する地域再生法関連資料に、頻繁に使われる文言として、「自立・自主・自考」を挙げている。そして地方都市におけるスローシティの実現に向けて、次の4つの指針を提示している。

- ①まちづくりの主役は市民、開放型コミュニティを創ろう
- ②コミュニティが運営する西欧型地域スポーツクラブを創ろう
- ③地域固有の文化・物語を發掘・創出しよう
- ④公共空間を市民ライフスタイル実現の場にしよう

上述の「まちづくり」に関する著者の考え方には、同分野を活動領域とする者としては、いささかの異議・反論はある。が、本書を読み終え、我が意を得たり、と共感した点がある。それは全ページを通じて曖昧表現の慣用語句である「思われる」という文言が使われていないことである。

著者の久繁哲之介氏は、「思われる」を使わなかった理由として、“あとがき”で誰の意見かわからない「思われる」等の責任回避表現は許されないとしている。その理由はスローシティと地域再生法の精神は、

「市民が自主・自立・自考して街づくりの主體的担い手」であり、本書は読者に自考を求めた。自考には広く柔軟な視点・感性とアイデアが必要となり、筆者はそれを提起することに務めた、と記している。

著述はもとより、大学における授業、仕事の一つの柱であるコンサルタント活動においても「思います」「思われます」を禁句としている私にとっては、同士を得たりの感が深い。

3. 幻の宰相 小松帯刀伝

坂本竜馬を公私にわたって支えた盟友小松帯刀清廉（きよかど）。そして後に「幻の宰相」ともいわれ、“幕末の朝幕間で最も重要な人物”ともいわれた小松帯刀の波乱にみちた36年間の短い生涯を精緻な考証をもとに書し、1986年に自費出版された『幻の宰相 小松帯刀伝』の復刻版である。著者は小松帯刀の顕彰という思いを本書に込めながらも、いたずらに情緒や感傷にとらわれることなく、長年の地道な資料収集とその読み込みに基づき、顕彰史観を超えた学術書、伝記として本書をまとめあげている。

NHK 大河ドラマ「篤姫」が放映されるまでは、主役の篤姫同様、小松帯刀は地元鹿児島を含め、全国的にも無名の人であった。事実、つい先ごろまで、鹿児島県立歴史館黎明館（れいめいかん）の展示物、出版物に篤姫や小松帯刀に関する記述は見られなかった。

『幻の宰相 小松帯刀伝』の著者、瀬野富吉氏は、「小松帯刀こそ大政奉還・明治維新の大功労者であったばかりでなく、科学技術を取り入れ、留学生を派遣し、商工業を起し、大商船隊による交易の利潤で、教育・経済・軍備を充実し、今日の経済大国日本と外交の基礎を築いた大恩人である」と評価し、その功績を説いている。

そして、1938（昭和10）年、昭和天皇が鹿児島を訪問された際、小松帯刀の功績を賞し、祭祀料を賜ったエピソードを紹介し、天皇が小松帯刀の功績を評価しているのに対し、人々は小松帯刀の顕彰を怠っていると嘆き、小松帯刀の墓は寂れ果て詣でる人もなく、生誕地や邸跡に石碑一つなく、彼の功績を伝える銅像もないことは慨嘆に堪えないと、落胆の気持を綴っている。

こうした思いが筆者を駆り立て、自費出版の書として書きあがったのが、1986年のことであった。この書はフィクションを織り込みながらも、極力具体的資料に忠実であろうとしていることから、維新研究史における研究論文としても高く評価され、南日本出版文化賞を受賞している。

今に生きる私たちは、復刻された本書を通じ、日本の夜明けに大きく貢献した薩摩の人・風土、歴史の重みを、再認識することができる。そして、幕府の鎖国政策のもとにあっても臆することなく、欧州の先進技術や文化を積極的にとり入れた先見性、そして明治維新の実現に向けての我を捨てての貢献、そして高潔無私、徳を重んじ和を尊ぶという小松の生き様は、100年に1度といわれる経済危機を脱すべく、将来の「行動指針」「あるべき姿」を模索するといううえで、貴重な示唆を得ることができる。

また、篤姫人気が一過性のフィーバーに終わらせないためにも、質の高い篤姫研究が望まれるところでもある。こうした面からも本書は、価値を持つ貴重な研究資料でもある。

（以上）